



すみだトリフォニーホール 小ホール

2017年9月15日（金）

主催：日本音楽舞踊会議／後援：季刊『音楽の世界』

協力：日本音楽舞踊会議 声楽部会

《プログラム》

第1 部：魅惑のオペラ・アリア コンサート

小野 彩波(Sop.)

ベッリーニ：『カプレーティ家とモンテッキ家』より “おお、幾度、幾度か”

V.Bellini: [I Capuleti e I Montecchi] ~ "Oh! quante volte, oh! quante"

高橋 順子(Sop.)

ヴェルディ：『ドン・カルロ』より “世のむなしさを知る神”

G.Verdi: [Don Carlo] ~ “Tu che le vanità”

村上 貴子(Sop.)

モーツァルト：『後宮からの逃走』より “あらゆる責め苦が待ち受けていても”

W.Mozart: [Die Entführung aus dem Serail] ~ “Martern aller Arten”

土屋 清美(Ten.)

プッチーニ：『トスカ』より “星は輝いていた”

G.Puccini: [Tosca] ~ “E lucevan le stele”

ヴェルディ：『リゴレット』より “ほほの涙が”

G.Verdi: [Rigoletto] ~ “Parmi veder le lagrime”

----- (休憩) -----

第2 部 ドヴォルザーク 歌劇『ルサルカ』 日本語縮小版 前半

A.Dvořák Opera 「*Rusalka*」 (Japanese version)

----- (休憩) -----

第3 部 上同 後半

ルサルカ：全 詠玉< Chon Yong Ok>(Sop.)／王子：加藤 太朗(Ten.)

魔女：小林 紗季子(M-Sop.)／水の精：狩野 賢一(Bas-Bar.)

外国の王女：三戸 はるな(Sop.)／大気の精（進行役）：佐藤光政(Bar.)

森の妖精 1：原田 智代(Sop.)／森の妖精 2：小松 美紀(Sop.)

森の妖精 3：三矢 菜璃(Sop.<M-Sop.>)

森番：西田 祐樹(Bar.)／料理人の少年：珍田 さほり(Sop.)

合唱：CMDJ オペラコンサート合唱団

ピアノ：亀井 奈緒美（全演目）／総合司会：佐藤 光政／演出：島 信子

企画・構成・音響・台本：中島 洋一／舞台監督：橘川 琢／照明：浦 富美

水の精の乙女（ルサルカ）原画作成：前川久美子

◆ごあいさつ ◆

2005年12月に第1回を開催した日本音楽舞踊会議（CMDJ）のオペラコンサートは、今年で第12回目を迎えますが、今回は第1部のアリアコンサートに続き、第2、3部ではドヴォルザークの歌劇『ルサルカ』を、判りやすい日本語縮小版で上演いたします。2014年の『カルメン』以来3年振りの舞台作品への挑戦となりますが、台本も、日本語歌詞も、すべて今回の公演のために用意したオリジナル版です。

世代を超えた実力豊かな歌手たちが、この日のために厳しい練習を積み重ねてまいりました。第1部から第3部まで、その成果を皆様に味わっていただいたすえ、感動していただくことができましたら、我々一堂にとってこの上のない喜びに存じます。

日本音楽舞踊会議 代表理事：深沢亮子

理事長：北川暁子

公演局長：北條直彦

オペラコンサート実行委員：浦富美、中島洋一



《演奏者・司会者プロフィール》

小野 彩波（おの・さなみ：ソプラノ）

桜美林大学総合文化学群（現・芸術文化学群）音楽専修ヴィオラ主科卒業。在学中オーケストラ、BSの「日本名曲アルバム」桜美林大学音楽専修女声合唱団（ソプラノパートとして）、卒業演奏などに出演。オーケストラでは、3年間首席ヴィオラ奏者を務める。声楽では、モーツァルト「フィガロの結婚」マルチェリーナ、ケルビーノ役を演じる。卒業後は、2016年エレクトーンオーケストラでソリストとして共演しデビュー。また、東大和市音楽連盟会員から推薦で東大和市音楽連盟主催のフレッシュコンサートに出演。その他に多数のコンサートに出演している。

これまでにヴィオラを久永泉氏に、声楽を久保田智子、日野昭子、初鹿野剛の各氏に師事。音楽家たちの晩餐会メンバー、日本音楽舞踊会議会員。





高橋 順子（たかはし・じゅんこ：ソプラノ）

千葉県市川市出身。桜蔭高校3年の時に岡部多喜子教授に師事する。武蔵野音楽大学声楽科卒業。在学中より、菊池初美教授、故ロドルフォ・リッチ氏に師事。千葉県新人演奏会に出演。同大学院を経て、岡部多喜子氏、野原広子氏のもと、イタリア歌曲、イタリアオペラ、日本歌曲に研鑽を積み、演奏会に多数出演、幅広い活動を行っている。日本音楽舞踊会議員。



村上 貴子（むらかみ・たかこ：ソプラノ）

国立音楽大学音楽学部声楽学科卒業、同大学大学院オペラコース修了。二期会オペラスタジオ第48期修了。第41回イタリア声楽コンクールソ入選、第4回東京国際声楽コンクール入選、第9回長江杯国際音楽コンクール優秀賞受賞。佐藤美枝子、田口興輔、菅家美保子、小牧まり、木村明昭に師事。これまでに大学院オペラ「ドン・ジョヴァンニ」ツェルリーナ役、大学院リート・アンサンブル演奏会、

日本音楽舞踊会議フレッシュコンサート、日本イタリア協会ニューイヤーガラコンサート、イタリアにてグッピオ夏期音楽祭、等に出演。その他、第九ソプラノソリストやオーケストラやエレクトーンとの共演。レストランでの演奏など幅広く活動。二期会会員。



土屋 清美（つちや・きよみ：テノール）

日本大学芸術学部音楽学科卒。藤原歌劇団オペラワークショップ研究科修了。国枝誠也・河本喜介、マダム・バダールの各氏に師事。1980年、フランス音楽コンクールに於いてフランス総領事賞受賞、藤原歌劇団創立40周年記念演奏会、「カルメン」「ラ・ボエーム」のロドルフォ「椿姫」のアルフレード、ほか日本のオペラ「春琴抄」「天守物語」など、多数のオペラに出演。その他サロンコンサートに数多く出演。95年より穂高絵本美術館森のおうち「歌と語りのコンサート」にレギュラー出演。蓼科高原三井の森 ハーモニーの家・高原芸術祭にも毎年出演。03年12月横浜市開港記念会館にてリサイタル。03年12月CD「静けさに歌う」をリリースする。2005年CMDJオペラコンサート『カルメン』の、ドン・ホセ役で出演。2009年、2013年CMDJオペラコンサートに出演。日本音楽舞踊会議・日本オペラ振興会・日本演奏連盟各会員・若き芸術家協会（YAA）運営委員。



全 詠玉（chon Yong Ok：ソプラノ）

東京都出身。国立音楽大学卒業、同大学院修了。二期会オペラ研修所修了。第19回友愛ドイツ歌曲コンクール第2位、日本R・シュトラウス協会賞受賞。第42回イタリア声楽コンクールソにてイタリア大使杯受賞。これまでに日生劇場開場50周年、東京二期会（宮本亜門演出）『フィガロの結婚』バルバリーナ、東京二期会『ドン・カルロ』天よりの声で出演。小澤征爾音楽塾『子どもと魔法』姫、火、ナイチンゲール役で出演。二期会会員。



加藤 太朗（かとう・たろう：テノール）

国立音楽大学声楽学科首席卒業。卒業時に矢田部賞受賞。東京藝術大学大学院修士課程オペラ科修了。二期会オペラ研修所第53期マスタークラス修了。特待生奨学金、優秀賞受賞。2010年 ボローニャ歌劇場オペラマスタークラス修了。第59回全日本学生音楽コンクール 声楽部門 大学・一般の部 東京大会第1位。第37回イタリア声楽コンクール イタリア大使杯受賞。2010年よりスペイン・マドリッドへ留学。日本人として初めてソフィア王妃立音楽院「アルフレード・クラウド」のクラスに入学。世界的バスバリトン歌手 トム・クラウド教授の下、2年間の研鑽を積み、2012年にディプロマを取得。アルベニス財団より奨学金授与。2014年マドリッド高等声楽学校にてアキレス・マチャード氏のマスタークラス修了。また2015年からは世界的バリトン歌手ロベルト・フロンターリ氏に師事、日々研鑽を積んでいる。第53回藝大オペラ定期公演『ラ・ボエーム』ロドルフォ役でオペラデビュー。以降、『コジ・ファン・トゥッテ』フェランド役、『椿姫』アルフレード役、『リゴレット』マントヴァ公爵役、『ロミオとジュリエット』ティバルト役、東京・春・音楽祭『バルジファル』小姓役等のオペラに出演。また東京二期会オペラでは『子どもと魔法』ティーポット役、『ナクソス島のアリアドネ』ブリゲッラ役、『薔薇の騎士』動物売り役出演。コンサートにおいてもベートーヴェン『ミサ曲ハ長調』『交響曲第九番』、バッハ『マタイ受難曲』、メンデルスゾーン『エリヤ』等、宗教曲のソリストとしても国内外を問わず活動。2013年にはスイスのレコード会社『Doron Music』より世界初となるオルガン伴奏版シューベルト「冬の旅」を全曲録音。スイス・ローザンヌ在住。ローザンヌ歌劇場合唱団所属。二期会会員。



小林 紗季子（こばやし・さきこ：メゾ・ソプラノ）

国立音楽大学声楽科卒業、国立音楽大学大学院オペラコースを修了。二期会オペラ研修所49期マスタークラス、新国立劇場オペラ研修所第9期生修了。研修所公演『アルバート・ヘリング』『フィガロの結婚』『カルメル会修道女の対話』に出演。文化庁在外研修生としてイタリアでも学ぶ。『修道女アンジェリカ』パデッサ役でイタリアデビュー。新宿オペラ『カルメン』、東京二期会『バルジファル』『ホフマン物語』『ジュリアスシーザー』、サイトウ・キネン・フェスティバル松本、青少年のためのオペラ『ヘンゼルとグレーテル』東京春祭『ワルキューレ』、日本演奏連盟創立50周年記念オペラ『三人の女達の物語』などに出演。豊潤で深みのある声をもつ新星として今後の活躍が期待される。日本演奏連盟会員、二期会会員。



狩野 賢一（かのう・けんいち：バスバリトン）

国立音楽大学卒業、同大学院修士課程声楽専攻首席修了。二期会オペラ研修所修了。第9回藤沢オペラコンクール奨励賞。様々な宗教作品のソリストを務める他、『第九』ソリストとして東フィルや大フィルと共演。また2015年セイジ・オザワ松本フェスティバル「子どものための音楽会」で『第九』バリトンソロを、同時期の「ロームシアター京都」竣工式では小澤征爾氏指揮のもと同ソロを務める。『ドン・ジョヴァンニ』レポレッロでオペラデビュー後、文化庁委託人材育成オペラ『魔笛』ザラストロ、小澤塾特別演奏会『蝶々夫人』ボンゾ、『フィガロの結婚』バルトロ、東京二期会『スペイン時間』イニーゴ、『バルジファル』聖杯騎士II、『ホフマン物語』ルーテル、東京・春・音楽祭『マイスタージンガー』フォルツ、日生劇場『アイナダマール』教師、新宿区民オペラ『ドン・カルロ』フィリッポ、立川市民オペラ『ボエーム』コッリーネ等を演ずる。2018年3月には東京二期会『ノルマ』にオロヴェーゾで出演予定。二期会会員



三戸 はるな（みと・はるな：ソプラノ）

国立音楽大学卒業。在学中に Vocal concert、卒業演奏会等に出演。東京藝術大学別科修了。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。多摩フレッシュ音楽コンクール入選。東京国際声楽コンクール入選。オペラでは《ラ・ボエーム》ミミ役でデビュー、その他《フィガロの結婚》伯爵夫人、《ランメルモールのルチア》ルチア、《イル・トロヴァトーレ》レオノーレ等。声楽を土屋雅子、佐藤ひさらに師事。二期会準会員。



原田 智代（はらだ・ともよ：ソプラノ）

神奈川県三浦市出身。国立音楽大学声楽専修卒業、同大学院声楽専攻フランス歌曲コース修了。在学中、大学院オペラ「フィガロの結婚」においてバルバリーナ役で出演。二期会オペラ研修所第57期マスタークラス修了。京都で行われたフランス音楽アカデミーに、これまで2度参加し、フランス歌曲の研鑽を積む。日本音楽舞踏会主催「オペラコンサート・シリーズ」に出演。第25回市川市文化振興財団新人演奏家コンクール声楽部門において優秀賞を受賞。これまでに声楽を保永秀樹、牧山静江、小泉恵子、ミレイユ・アルカンタラ、マリー=テレーズ・ケレルの各氏に師事。二期会準会員。



小松 美紀（こまつ・みき：ソプラノ）

山梨県出身。国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。声楽コース修了。イタリア、フランス、ドイツ歌曲をそれぞれ柴山晴美、秋山理恵、森明彦各氏に師事。第31回 CONCERT VIVANT 新人オーディション合格。2014年ウィーン国立音楽大学サマーセミナーにおいてディプロム取得。現在、混声合唱団アンサンブル・フェリーチェ副指揮。各種演奏会にて研鑽を積んでいる。



三矢 茉璃（みつや・まり：ソプラノ〈メゾ・ソプラノ〉）

北鎌倉女子学園中学校音楽コース及び、同高等学校音楽科を経て、国立音楽大学音楽学部声楽専修卒業。声楽コース修了。現在、二期会準会員。第54回鎌倉市小・中・高学生音楽コンクール鎌倉音楽クラブ賞受賞。第41回神奈川県新人演奏会に出演。これまでに中村浩子、門脇郁子、吉田顕の各氏に師事。



西田 祐樹(にしだ・ひろき：バリトン)

国立音楽大学音楽学部声楽学科卒業 第35回長崎県新人演奏会オーディションにて優秀賞を受賞し同演奏会に出演 長崎県主催のチャリティーコンサートにて第九ソリストやジョイントコンサートを行うなど長崎県内を中心に活動 最近第8回フランス歌曲研究コンサートに出演など県外での演奏会に多数出演し活動をしている これまで声楽を中武幸嗣、秋山理恵の各氏に師事

ヴェルディ：『ドン・カルロ』より “世のむなしさを知る神”

19世紀オペラ界の巨匠、ジョセッペ・ベルディ(1813-1901)は数々のオペラ作品の傑作を残しております。パリ、オペラ座の依頼によりグランド・オペラ様式で書かれた「ドン・カルロ(1865-66)」は、1867年パリオペラ座で初演されましたが、彼の最高傑作の一つで、初演後、幾度かの改定が行われています。

“世のむなしさを知る神”は第5幕で、エリザベッタが、スペインの王子ドン・カルロにロドリーゴの遺言を伝え、王子の新しい人生を見守らねば、と自分の運命を歌うアリアで、長い前奏に導かれ、嬰へ短調 4/4 で深い想いをこめて歌い出しますが、彼女の心の流れに沿い、調、曲調が移り変わって行き、最後は 祈りをこめて、嬰へ長調で閉じられます。

モーツァルト：『後宮からの逃走』より “あらゆる責め苦が待ち受けていても”

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)は、器楽作品のみならず多くのオペラ作品を残しておりますが、1782年に作曲された『後宮からの逃走』はドイツ語によるジングシュピール(歌芝居)として書かれた若き日の傑作です。“あらゆる責め苦が待ち受けていても”は、海賊に捕らわれ、太守ゼーリム売られたベルモンテの婚約者コンスタンツェが、第2幕第3場でゼーリムに暴力を使うと脅され、「自分はどんな拷問も苦痛も恐れない」と歌うアリアで、アレグロ、ハ長調 4/4 で力強く歌い始めます。途中でト長調に転調しますが、ハ長調に戻ると昂揚した感情を表すかのようにテンポが速くなり、高度なコロラトゥーラの技巧を要する急速な音階が歌われ、曲を終えます。

プッチーニ：『トスカ』より “星は輝いていた”

歌姫トスカと画家カヴァラドッシとの悲劇的愛を描いたオペラ『トスカ』は『ボエーム』、『蝶々夫人』と並ぶジャコモ・プッチーニ(1858-1924)壮年期の三代傑作といわれていますが、この作品は1899年に完成し、初演は1900年1月14日、ローマのコスタンツィ劇場で行われています。

“星は輝いていた”は第3幕で、カヴァラドッシが歌うアリアで、脱獄した友人を匿った罪で捕らえられた彼は、看守に指輪を与え手紙を書く許しをえて、思い出に耽って歌います。(口短調、拍子は3/4 ですが時折 4/4 に変わります) 呟くように歌い始めますが、次第に感情が昂ぶって行き、歌い終わると、感情を抑えきれなくなり、顔を手で覆って泣き出します。カヴァラドッシの張り詰めた気持ちが伝わって来る、胸をうつアリアです。

ヴェルディ：『リゴレット』より “ほほの涙が”

ユーゴの原作をもとに1951年に作曲されたオペラ『リゴレット』が、オペラ作家としてのヴェルディの名を不動なものにした傑作であることはいうまでもありません。これほど凄まじく陰惨な劇的世界は、あるいはプッチーニには描けなかったのではないかと思います。

“ほほの涙が”は、第2幕で、自らが愛を告白したジルダが行方不明になったと聞き、好色で女たらしと思えるマントヴァ公爵が、珍しく殊勝になり、ジルダの身を案じて歌うアリアです。二短調 4/4 の速いテンポで始まりますが、アダージョ 変ト長調 3/4 で、ジルダへの想いを叙情的に歌い上げます。

リゴレットのテノールのアリアとしては、“女心の歌”が特に有名ですが、このアリアも、テノールの魅力を引き出す名曲といえましょう。

第2、3部 ドヴォルザーク 歌劇『ルサルカ』 日本語縮小版

《第1幕》

電子オーケストラの前奏で幕が開き、大気の子の台詞が入ると、3人の森の妖精たちが歌い踊りながら、水の精をからかっています。ルサルカは、時々湖に姿を現す王子への強い想いを歌います

が、水の精はそんな我が娘を哀れに思い嘆きますが、どうしても願いを叶えたいなら魔女を呼ぶようにと告げます。ルサルカは月に向かい自分の愛が王子に届くように願います。(月に寄せる歌) 天変地異を予感させる雷鳴が鳴り響き、ルサルカの呼びかけに、魔女が姿を現します。ルサルカは、たとえ声を失ってもよいから自分を人間にしてくれるよう、魔女に嘆願します。魔女が「チェリ ムリ フーク」と歌いながら魔法をかけると、ルサルカは口が利けなくなる代わりに歩けるようになります。

狩りのホルンが鳴り響き、王子が姿を現します。王子は不思議なものの気配を感じ、探します。そして人間に変わったルサルカをみつけ「不思議な幻 おとぎの国の姫かな」と歌います。湖の底から「妹！妹！一人欠けたわ」と、人間に変わり水の世界から去って行くルサルカを嘆く水の精の姉たちの合唱がきこえてきます。王子はルサルカを連れてお城に向かいます。二人の運命を訝る大気の精の言葉がきこえます。

《第2幕》

電子オーケストラで森番と料理人の少年を表す音楽が奏されると、大気の精が二人の登場を告げます。二人は、最近王子の身の回りに起こっていることを心配そうに歌い、語ります。二人が去ると、王子がルサルカを伴って舞台に現れます。王子がルサルカに自分の願いを伝えようと歌うと、外国の王女が現れます。物言わぬ冷たい体のルサルカに手子ずっていた王子は、艶やかで勝ち気な外国の王女に次第に惹かれて行きます。外国の王女はルサルカに「王子は私のもの、でも心はあなた」と語り王子と去って行きます。電子オーケストラで、華やかな祝典の舞踊音楽がなり響きます。

水の精がルサルカの運命を心配して歌います(水の精のアリア)。結婚式を祝うコーラスが聴こえて来ます。ルサルカは王子の心が自分から離れて行くことに不安を感じ、父である水の精に訴えます。王子と外国の王女は戻ってきますが、心変わりした王子は熱い想いを外国の王女に打ち明け、ルサルカの手をとると突き放します。しかし、水の精の魔力では正気を失った王子は、外国の王子に助けを求めますが、外国の王女はけたたましく笑いながら「地獄に落ちるがいい、あの女のところへ」と叫び去って行きます。照明が点滅し、不吉な予兆が漂うなかで幕が下ります。

————— 第2幕が終わり休憩に入る —————

《第3幕》

電子オーケストラの前奏の後、大気の精がルサルカの身にかかった残酷な運命について語ります。王子のもとを去り、絶望の中でも死ねない自分を嘆くルサルカ、魔女が「もう戻って来たのかい」と呼びかけ、魔女は「愛の呪いを消すには人の血が必要、王子をこのナイフで刺し殺せば、お前は再び水の精に戻れる」と歌い、ルサルカにナイフを渡します。しかし、ルサルカは泣きながら「私には出来ない」と叫び、ナイフを湖に投げ捨てます。ルサルカの運命を歌う水の精の合唱があり、オーケストラの間奏の後、森番と料理人の少年が姿を現します。二人は、第2幕の後正気を失った王子を心配し、王子の病気を治すため、魔女の力を借りようと、恐ろしい魔女を訪れたのです。少年が「女(ルサルカ)が姿をくらました」と歌うと、水の精が現れ「あの子を裏切って、呪われの身としたのはあの男(王子)の方ではないか」と恐ろしい形相で叫ぶと、森番と少年は恐怖に襲われ逃げ去ります。魔女もまた去ります。

森の妖精たちが現れ、それぞれが自分を自慢しながら可愛らしく歌います。そして、妖精たちは、水の精をからかおうとしますが、悲しそうな有様を見て、不安を感じ去って行きます。

すると王子が放心状態で現れます。ルサルカは「いとしい人、私が判るの?」と言うと、やりとりの中で二人は次第に愛を蘇らせて行きます。王子が「キスしておくれ」歌うと、ルサルカは「私のキスを受けると貴男は死ぬのよ」とためらいますが、王子は「キスしておくれ、安らぎが欲しい、もうこの世に戻りたくない」と歌うと、ルサルカは王子を優しく抱きながらキスをします。王子は安らかに息を引き取ります。

ルサルカが王子をいたわるように抱きしめるなかで、幕となります。

アンデルセンと私

私は小学校中高学年の頃は、郷里の田舎では比較的珍しいほどの読書少年でした。親に買ってもらったり、学校の図書館から借りたりして良く本を読みました。しかし読んだ本の殆どは、自然科学（主に天文学関係）の本か、童話、又は子供向けに編集された小説などで、ジャンルは限られていました。しかし、小学5年の冬に病気で実母を亡くしてからは、生活態度が一変し、青白い読書少年から、真っ黒になって遊ぶアウトドア少年に変貌しました。小学6年から中学にかけては、手塚治虫の漫画が大好きで、友達との間で、お互いが所有する少年雑誌を貸し借りし、廻し読みをしたものです。それでも、アンデルセン、小川未明、オスカー・ワイルドの童話などは、細々と読み続けていたように記憶しております。

中学生の頃は良く遊びましたが、この頃になると自分自身の性格が、仰々しく饒舌な表の顔と、孤独で内向的な裏の顔とに分裂しかかっているのを感じていました。アンデルセンの童話などは、孤独や不安に襲われやすい自分にとって、心のオアシス、避難所だったのかもしれません。

思春期の私がアンデルセンの童話のどこに惹かれたのか、それは、極限の不幸を経て至福の時に至る主人公の運命と自分を重ね合わせることで、カタルシスが得られたからだと思います。寒さに凍えそうな貧しいマッチ売りの少女が、売れ残ったマッチのすべてに火をつけると、天国のお婆さんが現れ少女を抱きしめ、少女は幸福感に満たされながら天国へ昇って行きます。「みにくいアヒルの子」と仲間からさげすまれ、劣等感にさいなまれていた若鳥は、ある時、自分が鳥の中で最も美しい鳥、白鳥になっていたことに気づきます。アンデルセンの童話の中でも特に強く印象に残ったのは、少女ゲルタが様々な困難を乗り越え雪の女王のお城に辿りつき、ついに少年カイの心臓に刺さった氷のかけらを愛の力で溶かし、カイの心を蘇らせる「雪の女王」の物語でした。ところが、「人魚姫」の物語も読んではいたものの、あまり強く印象に残っていません。人魚の物語では、小川未明の「赤い蠟燭と人魚」の方が、人の世の営みの悲しさが描かれ、強く心に残っています。



大学を出て、実家の商売を継いだり、サラリーマンになるというような人生の将来像が描けず、それを拒否した私は、念願が叶い、音楽大学に入学しました。音楽大学で勉強する中で、特に興味を抱いたオペラ作品は、ワーグナーの楽劇、それからドビュッシーの「ペレアスとメリザンド」などでした。しかし、学生の頃、今回公演の「ルサルカ」と同系統の題材による、故三善晃作曲の音楽詩劇「オンディーヌ」が放送され、幻想的なストーリー、緻密に書かれた美しい音楽、電子楽器オンドマルトノの不思議な響き、オンディーヌ役の台詞の美しい声、それらを融合した詩的な世界は、20歳になったばかりの私には、とても蠱惑的に感じられました。

音楽大学を出た後は、幸いなことに音楽大学に職を得ることができましたが、そういう中で、ヴェルディ、プッチーニなど、イタリアオペラ作品にも接するようになりました。しかし、『ルサルカ』については、“月に寄せる歌”を聴くくらいで、作品を深く知るのは、ずっと後になってからのことです。『ルサルカ』をいつか舞台にかけてみようと思い、研究をはじめてみると、この作品には青年時代研究をしたワーグナーの影響がみられることを感じましたが、また、少年時代に読んだアンデルセンを思い起こさせました。ドヴォルザーク自身が、アンデルセンの「人魚姫」の原作を読んでいたかどうか私には判りませんが、この作品の台本を書いたヤロスラフ・クヴァビルが、

アンデルセンの「人魚姫」を読んでいたことは、多分間違いないでしょう。そして、ドヴォルザークがその台本に強い感銘を受け、創作意欲をかき立てられたことも、確かだと思います。つまり、アンデルセンの世界は、やはり歌劇『ルサルカ』の生成に大きな影響を与えたことでしょう。

『人魚姫』と『ルサルカ』はストーリーの上では、類似点と相違点があります。人魚姫は人魚ですから海に棲んでいますが、ルサルカの故郷は湖となっています。刃物で王子を殺しその血を体に浴びれば人魚または水の精に戻れること。しかしそれが出来ずに、刃物を海または湖に捨てるところも同じです。その後、『人魚姫』の方は、王子が結婚すると、人魚姫は死んで水の泡になって消えてしまう筈だったのに、死なずに空気の精になり、王子の花嫁にキスし、王子に微笑みかけて、大空に昇って行きます。そして 300 年善行を積み、天国に行けることが約束されるところで、物語は閉じられます。子供の頃、あまり強く印象に残らなかったのは、この終わり方にあるようです。人魚姫が水の泡にならず、空気の精になりやがて天国に行ける道が開けたのは、王子を殺さなかった人魚姫の魂に対する神様からのご褒美、つまり救済でしょう。キリスト教的な魂の救済を描いたこの終わり方が、まだ子供だった私には、よく理解できなかったのだと思います。

『ルサルカ』では、自分にすべてを託して死んでいった王子の亡骸をやさしく抱いて、湖の底に沈んで行きます。(台本のト書きには、単に「湖水に姿を消す」とだけ書かれていますが。)

では、アンデルセンの「人魚姫」の物語はどこから来たのでしょうか。ヨーロッパには、オンディーヌ(仏)、ウンディーネ(独)、ニンフなど水の精霊、妖精の伝承が色々あります。ルサルカはスラブ系民族の伝承で、西ヨーロッパのオンディーヌと同系統の精霊です。豊かな詩的感性と想像力をもつアンデルセンが、それらを見逃すわけがありません。ヨーロッパ中を旅して渡り歩いたアンデルセンは、各地伝わる伝承を自分の創作の糧としたことでしょう。

当然ですが、精霊、妖怪などの伝承はヨーロッパのみならず、東洋などあらゆる地域、民族間に存在します。我が国にも類した伝承が色々あります。例えば、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の「雪女」も、日本各地に伝わる雪の妖怪の伝承をもとに、怖くも美しい物語にまとめ上げたものです。約束を破り真実を語ってしまった巳之吉を殺せずに去ってゆくところには、人魚姫などとの共通性が見られます。そこには作者の人の魂の営みに対する深い愛が感じられます。

人が、自然と対峙し、神秘的な力や畏れを感じた時、水の精霊、森の精霊など自然の精の存在を思い浮かべます。また、自分の心の中に存在する憎しみや、残虐性など恐ろしいものに気がついた時、妖怪、鬼、悪魔などを創出し、それを、そのもののせいにしようとします。妖精、精霊、妖怪、悪魔は、人の心を映し出す鏡のようなものではないでしょうか。

また、人はなかなか得られないもののほど、強く得ようと願うものかもしれません。人の心は時とともに移り変わり行くもので、同じ状態を維持することは不可能です。従って変わらざる永遠の愛など存在しないのかもしれません。だからこそ、それを願う心が、存在し続けるとも云えましょう。

今回提供する作品は 19 世紀に書かれたものですが、そこにもられた「愛と裏切り」のテーマは、人間が時空を超えて問い続けるテーマと思われます。

最後に！ 今回の公演を目指して、出演者スタッフ一同、懸命に練習を積み重ねてまいりました。もし、皆様方それぞれの心に、何かを伝えることが出来ましたら、まことに嬉しく存じます。

CMDJ オペラコンサート実行委員長

中島 洋一



今回の公演に関する、出演者からのメッセージ

小野 彩波（ソプラノ） 第1 部アリアコンサート出演

はじめまして!ソプラノの小野彩波(おのさなみ)と申します。

本日はベッリーニのオペラ『カプレーティ家とモンテッキ家』より『ああ、幾度か』を歌わせて頂きます。みなさん、『カプレーティ家とモンテッキ家』ってご存知ですか？実は…『ロミオとジュリエット』です！ベッリーニがヒット作でもあります。物語はいわずと知られたロミオとジュリエットの悲恋譚です。アリア『ああ、幾度か』はジュリエットが歌うアリアです。

悲しい旋律と美しい装飾が同居する屈指のアリアです。みなさんはもし、顔も見たこともなく、愛してもない相手と今日にも結婚って言われたらどんな気持ちですか？憎しみ、悲しみ、愛した人と結婚したいという気持ちで皆様にお届けしたいです。

高橋 順子（ソプラノ） 第1 部アリアコンサート出演

17 世紀初頭 イタリアのフィレンツェで生まれたオペラ！サロンで役者が朗唱したり その合間に歌ったりする事で 理想の芸術を見出そうと競い合っていました。

音楽芸術と文学が融合したギリシャ劇を復活させる試みが今日に続くオペラ誕生のきっかけとなったのです。オペラにおいては 最高の歌唱力の追求から ベルカント唱法が発展しました。ベルカント唱法は 「自然で美しい声、均質な声質、注意深い訓練によって高度に華麗な音楽を発声できる」 ことです。そしてさらに劇的歌唱法へと発展します。声帯という楽器を使い 声で言葉を ストーリーを表現し創り出す音楽の世界が 皆様の心に伝わりますよう 願っております。

村上 貴子（ソプラノ） 第1 部アリアコンサート出演

昨年に引き続き出演させて頂く事になり大変うれしく思っております。コンサートを盛り上げたいと練習に励んでおります。

さて今回私が演奏する曲は、モーツアルトの「後宮からの逃走」というオペラの中の一曲です。海賊の手に落ち太守セリムに売られたコンスタンツェが、セリムに対して「どんなに苦しめても私は恋人に対する操を守るわ。どんな方法で苦しめられても笑い飛ばしてやるわよ」と強い意志と「さあ、やってみなさいよ！」と音楽の中で笑って見せるようなモーツアルトラしい面白さのある一曲です。

後半は「ルサルカ」とのことで大変珍しい演目。出演しておりませんが私も楽しみにしております。文末になりましたが、お客様や興味を持ってくくださる方々に支えられオペラコンサートも 12 回目となりました。お客様と関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

土屋 清美（テノール） 第1 部アリアコンサート出演

今年は、プッチーニのオペラ「トスカ」よりテノールのアリアといえはこの曲と、言われるカヴァラドッシの歌う”星は輝いていた”とヴェルディのオペラ「リゴレット」より第2幕でマントヴァ公爵が歌う”ほほの涙が”を歌います。公爵はジルダが誘拐されたと知って歌う。心配と犯人への復讐、そしてジルダへのひたむきな愛が表されるこの歌は、公爵の真の愛を垣間見せるアリアです。

昨年もこのコンサートに出演予定でしたが、直前にドクターストップになり断念。入院手術で19日間病院のベットにいました。主治医も回診のたびに声はどうですかと、気にかけてくれます。退院後もすぐにはあまり声を使わないようにと言われ、喉も休養です。でも許可が出て昨年12月からは歌い始めました。なんだか前より声が出るみたい、、、、。まだまだ歌います。

全 詠玉（ソプラノ）『ルサルカ』配役：ルサルカ

本日はご来場頂きありがとうございます。

私事ではありますが、この春に出産を経験しました。妊娠期間から産後にかけて、肉体的、精神的な変化に戸惑いながらも、歌い手として改めて自分と向き合うきっかけとなりました。そして自分の人生において音楽がどれほど大きな存在なのかということに気づかされました。本日は大学院時代の同期や先輩、後輩と素敵な共演者に恵まれ舞台に立てることをとても嬉しく思います。

加藤 太郎（テノール）『ルサルカ』配役：王子

今回は出演者本人の事情で、メッセージ掲載を割愛させていただきます。

小林 紗季子（メゾ・ソプラノ）『ルサルカ』配役：魔女

今回魔女役を演じます。メゾ・ソプラノはソプラノより声の幅が広いので、オペラではよく母親役や魔女役などが配役されることが多いのですが今回は魔女イェジババです。

アンデルセンの人魚姫が元になっていますが、更に愛に特化しているオペラになっています。今回はチェコ語ではなく日本語でお話が進んで行きますが、魔女がアリアの中でチュリムリフークという言葉をよく使います。これはチェコ語で日本語のチチンブイブイみたいなものです。

ルサルカが人間になるために力を借りる魔女イェジババ。

悪役を心から楽しみたいと思います。

狩野 賢一（バス・バリトン）『ルサルカ』配役：水の精の王

本日はお忙しい中、当オペラコンサートにお越し下さり、誠にありがとうございます。第1部では様々なオペラアリアを、そして第2部と第3部ではドヴォルザーク作曲のオペラ《ルサルカ》を日本語訳詞による歌唱と台詞で、ということで、多彩な舞台をお楽しみ頂ければ幸いです。この《ルサルカ》というオペラは、元々はドヴォルザークの母国語であるチェコ語の歌詞で作られているため、なかなか上演される機会は多くないのですが、その作品を日本語訳詞に変更し、しかも台詞で繋ぎながらの短縮上演というのは、非常に珍しい、また分かりやすい試みだと思います。また今回の共演者の中には、私の大学時代の先輩や後輩、サークルの後輩、大学院の後輩や同期といった懐かしい面々も多く、私自身彼らとの共演を楽しみにしております。是非フレッシュな熱演をお楽しみ下さい。

三戸はるな（ソプラノ）『ルサルカ』配役：外国の王女

この度はじめてCMDJのコンサートに出演させていただくこととなり、大変嬉しく思っております。私は今回《ルサルカ》にて「外国の王女」を演じさせていただくのですが、この役は物語の起承転結の”転”の部分に大きく関わる重要な役どころです。自由な解釈のできる役なので、どのように完成するのか楽しみながら稽古に励みました。

「ルサルカ」はあまり上演機会の多くない作品ですが、今回は日本語縮小版での公演ですので、ドヴォルザークの素晴らしい音楽を気軽に楽しんでいただけたかと思います。

西田 祐樹（バリトン）『ルサルカ』配役：森番

今回がオペラ初挑戦！！初めて経験するオペラの稽古場。

練習を重ねるごとに共演者それぞれの音楽が融合し、一つの作品が出来上がっていく。積み重ねた時間がチームワークを高めて、明るく華やかな色に音楽が変わっていく。全ての過程が新鮮で、初めて見る光景でした。

一つのオペラ作品を作りにあたって沢山の時間が必要ですが、何より出演者が懸命に成功させる

一心を持ち続けることが聴いてくださるお客様の喜びや感動に繋がるのだと思います。
本日共演者で積み重ねた一つのオペラを楽しんで頂きたいと思っております。

珍田 さほり (ソプラノ) 『ルサルカ』 配役：料理人の少年

人魚姫は誰しも一度は読んだことのある、アンデルセンの有名な童話だと思います。
人間の王子に恋をした人魚姫、最後は泡になって消えてしまうという悲しい結末となってしましますが、その儚さが物語の美しさを表しているのではないかと思います。
ドヴォルザーク作曲の、歌劇『ルサルカ』はスラブ神話に登場する水の精の名前です。
チェコの神話と童話の融合したこのオペラは、童話の持つ儚さと、チェコならではの美しい音楽の傑作ではないかと思います。
あまり知られているオペラではありませんが、今回のこの日本語上演を通じて、皆様に好きになるきっかけとなっていただけたら、とても幸いです。
私の演ずる、料理人の少年は原作には出てこないオリジナルですが、少年と森の番人がストーリーを進めて行く、オペラの中でとても重要なキャラクターとなっています。快活けどちょっぴり怖がりな少年を演じます。最後までどうぞ、このオペラの世界をお楽しみください。

原田 智代 (ソプラノ) 『ルサルカ』 配役：森の妖精 1

本日はこのような舞台に出演できることを大変うれしく思います。「ルサルカ」は題名やアリアが有名ですが、お話すべてを知る機会私は今までありませんでした。人魚姫のお話と言っても、童話などのお話とは少し異なりますが、音楽が描く美しく、時には不気味で怪しげな情景を「ルサルカ」のストーリーと共に、膨らませて聴いて見ていただきたいと思います。私は森の妖精を歌わせていただきます。空に舞う暖かい風や森に響く木霊。湖面を揺らしたり、小鳥をびっくりさせて起こしたり、花の種を運んだり、そんないたずら好きな妖精を演じられるよう努力していきます。素敵な舞台になるように心をこめて歌わせていただきます。

小松 美紀 (ソプラノ) 『ルサルカ』 配役：森の妖精 2

今回若輩ながら「ルサルカ」にて森の妖精Ⅱ役のお話をいただきましたこと、本当に嬉しく思います。実力派のみなさまとご一緒に緊張しますが、ここはよく勉強させていただこうと思っております。

私事ですが、夏休みに日光の中禅寺湖に行きました。湖は、濃い緑と青白い霧で覆われていました。少し肌寒くて、不気味なのです。しかし森の中を散策すると露がきらきらしていたり、木がさわさわ音を立てたりして、とてもきれいでした。

森の妖精は人間ではありません。自然の中にあって美しさも恐ろしさも兼ね備えたモノなのかなあと感じました。中禅寺湖にも妖精がいるのかもしれませんが。ほう、ほう、と木霊のように歌いはじめる妖精が不気味に映るのか可愛く映るのか、とても楽しみです。

この度、演奏の貴重な機会をいただき、中島先生はじめ皆様に改めてお礼申し上げます。

三矢 茉璃 (ソプラノ〈メゾ・ソプラノ〉) 『ルサルカ』 配役：森の妖精 3

本日は、オペラコンサート「許されざる愛の物語」にお越しくださり、ありがとうございます。この度、森の妖精のメゾソプラノパートを担当させていただきます。最初にお話をいただいたときには、私がこの役を引き受けて良いのかという迷いがありました。というのも、大学時代までは、メゾ・ソプラノとして歌っていたのですが、現在ではソプラノで活動しているため、低音部分でしっかり声を出すことができるのか、バランスの良いアンサンブルにできるのかという不安があったからです。しかし、稽古を積むにつれ、学ぶことが多く、特にアンサンブル部分では、低音部の動

きをどう表現するか、全体の音のバランスはどうかということを考えながら、メンバーと音楽を作り上げていくことは、大変有意義なものとなりました。妖精の美しくも妖しさのあるハーモニーをお聴きください。

佐藤 光政（バリトン） 総合司会& 『ルサルカ』配役：大気の精

今回、“大気の精”と言う。本来の作品にはいない“進行係（？）”という役柄で参加する事になりました。若手のバリバリの現役の歌手達のその“声”を、客席の皆様達とご一緒に楽しめる事は、嬉しい限りであります。さあ、間もなく開演デス！。

亀井 奈緒美（ピアノ）

私がこの音舞会のオペラに携わるようになったのは2005年、今から12年前。その間、抜粋も含めオペラの演目は10作品。カルメンとメリーウィドウは2回ずつやっているのだが、12年目の11作品目が、ドヴォルザークの『ルサルカ』。とにかくあの有名な美しく壮大な素晴らしい「新世界」を作った作曲家なので、そのオペラのオーケストラ伴奏をピアノに書き直すと10本の指で、その速度でその音の多さはある得ないという楽譜だった。だいたい、オペラのスコア（ピアノ版）は全てを音にすると時にはうるさいため、必要な音を選んで自分で割愛して弾くのだが、今回はドヴォルザーク特有の美しい和声をどのように残して、歌と一緒にした時に綺麗に聞こえるのかを考えて、作曲の友人にもアドバイスをいただいた。いつものことだが、この会はそれこそあり得ない短い期間で演奏者に作らせる。今回のメンバーは皆、とても素晴らしい力のある方々のため、もう少しあわせる時間があったらもっと聴えてくる音を整理できるのと思う。

当日、素敵なメンバーそれぞれが、その役と共に素晴らしい魅力を皆様にお届けできますよう、どんな場合にも支えられるよう、ピアノ伴奏でもこのオペラなかなか良かったと思っていただけるように、最後の最後まで出来る限りの努力をしようと思う。そしてご来場いただいた全てのお客様に素敵な『ルサルカ』がお伝えできますように。

島 信子（ソプラノ）:演出

オペラ「ルサルカ」を初めて観ると、まず王子が優柔不断という印象を受けるかもしれない。王子サイドでこのオペラを見てみると、ルサルカと初めて出会った時に、一目で恋に落ちて城へ連れ帰ったが、派手で気の強い「外国の王女」の積極的なアプローチに心変わりし、一度は愛し合ったルサルカを裏切ることとなる。それを 水の精 Vodnik に呪われ、王子の死を以ってその呪いを解くこととなる話である。

一方 水の精ルサルカは、いつも森で見かける王子に恋をし、自分の世界（身分）を捨ててまで、「人間」になり 王子と出会いたいと願い、それが許された。「人間」になる代償として「話せない」カルマが付いていたルサルカを、丸ごと愛せなかった王子には、呪いがかかる。その報いは「王子の死」をもってのみ解かれる。王子を愛するルサルカには非情な運命となり、最後は二人「再び愛し合う」という皮肉な物語である。

人間からは妖精の世界が見えないが、妖精たちからは人間の世界が見えている。人間たちの振る舞いには因果応報があり、絶えず「天」に見られているということを、肝に銘じて生きなければならない。自分たちの住む地球、宇宙を大切に、驕らず、欲張らず、分け合っていかなければならない。自分たちの住む地球、宇宙を大切に、驕らず、欲張らず、分け合っていかなければならない。こんなことを考えさせられるオペラである。

社会福祉法人 緑の風



社会福祉法人緑の風は、知的障碍のある人達が
「地域で自分らしく暮らし、地域で働くこと」の
支援を行うために活動をしています

社会福祉法人 緑の風 <http://www.midorinokaze.jp>

長坂センター : 〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ヶ森 994-1
障害福祉サービス事業所「緑の風」

千代田センター : 〒102-8688 東京都千代田区九段南 1-2-1 九段第3合同庁舎内
千代田区立障害者就労支援施設 ジョブ・サポート・プラザ ちよだ
障害者就労支援事業 さくらベーカリー



社会福祉法人「緑の風」を支援する「麦の会」

後援会「麦の会」は、「緑の風」の活動を支える組織として2003年に発足しました。

会員の皆様のご支援とご協力により、「緑の風」主催の催し物への参加、チャリティーコンサート開催やオリジナルカレンダー販売などの活動をし、その収益は「緑の風」への援助金として寄付しています。